

# MATSUMOTO YAMAGA F.C.

## VS AC Nagano PARCEIRO

Sunday 08 June

08 HFL Division 1 week 7

僕が初めて山雅のゴール裏に行ったのは、3年前の夏のことだった。当時ボランティアスタッフとして活動していた僕は、山雅の試合を最初から最後まで観戦したことが無かった。その日はホームゲームの運営が無い試合だったので、僕は初めてサポーターとして、スタンドに行く機会に恵まれたのである。

県選手権大会準決勝。午後6時半キックオフのナイターゲーム。会場はアルウィンだったが、山雅サポーターに割り当てられたのはアウェイ側のスタンドだった。そして、対戦相手は長野エルザ。後のAC長野パルセイロである。当時も山雅とエルザはJを目指すクラブとして、一応のライバル関係にあった。しかし、それは今よりも少し一方的なものだったかもしれない。というのも、その頃の山雅は北信越の2部で、エルザは1部に所属していたのだ。両者の力関係には、まだまだ大きな差があった。事実、その前の週に行われた全国社会人選手権の予選決勝では、1-5で山雅はエルザに敗れている。県選手権でもエルザ優位は揺るがない。それが周囲の見方だった。そんな中で始まった信州ダービー。

しかし、先制点を取ったのは松本山雅だった。前半が始まって15分。決めたのは山雅のトリックスター、小澤修一。当時のスタメンの中で唯一今も山雅に在籍する小澤が決めた殊勲の先制点に、スタンドは沸いた。エルザもすかさず反撃する。10分後に同点ゴールを決めて1-1。その後も両チームは白熱した攻防を繰り返して、そのままのスコアで前半を終了。エルザ優位と見られていたこの試合は、思いのほか接戦の様相を呈していた。

ところで、僕はそれまではそれほど山雅に執心してはいなかった。もちろん山雅のことは好きだったが、そんなに熱心なサポーターでもなかったのだ。例えばアウェイの試合も、終わってからやっと試合があったことに気が付いて、「一応見とくか」とホームページで結果をチェックするような塩梅だった。しかし、その日は試合が進んでいくにつれて、だんだんと深くのめり込んでいった。

チャント(応援歌)は全く覚えてなかったの、歌いながら覚えた。飛び跳ねて応援するのも初めてで、何をすることも見よう見まねだった。しかし、そうやって必死に付いて行くうちに、少しずつピッチ上での戦いに本気で反応している自分に気が付いたのだ。僕は急速に確実に、熱狂的なサポーターへと変貌していった。

## 「原点」

後半、山雅サポーターは更に熱い声援を送り続けるものの、エルザもここにきて山雅を突き放しに掛かる。立て続けの2失点で1-3とリードされてしまった。しかし、それでもサポーターは最後まで諦めず、チャントを歌った。それは、タイムアップのホイッスルが鳴るまで続いた。

結局、僕が初めてサポーターとして戦った信州ダービーは、1-3の敗戦だった。しかし、ゴール裏で90分間選手に声を送り続け、サポーターとして、山雅に関わる人々とこの時間を共有したことには、言葉で言い表せないような快感があった。山雅を応援することは、すごく楽しかったし、興奮したし、気持ちいいものだった。そして、もう一つあった感情は、次こそ勝ちたいという気持ち。その二つの感情を混ぜ合わせたまま、僕はアルウィンを後にした。

あれから3年。語りつくせないほどの濃密な時間を経て、僕は今ではゴール裏でコールリーダーをやっている。その間、山雅を取り巻く環境も大きく変わったし、僕自身、山雅との関わり方も変わった。しかし、自分の中心にある気持ち。山雅で勝ちたいという気持ちは、3年前のあの夏の夜から変わっていないと思う。

そう。サポーターの根底にあるのは、山雅が好きで、楽しくて、それを共有できる仲間と共に勝ちたい、という気持ちだ。その気持ちがあるからこそ、みんな山雅のために何が出来るかを考え、行動する。それぞれが考える最善の行動は少しずつ違うかもしれないが、根のところではみんな同じ気持ちを持っているのだ。それだけは忘れてはならないと思う。

今シーズンのここまでの戦況は、確かに良いとは言えないものだった。負けることで自信を失い、気持ちが折れそうになった仲間もいるかもしれない。しかし、それでも僕らは叫ばなければならない。松本山雅の誇りを。チームが勝つために一つの方向に向き、戦っているのだから。僕らはそれを支えなければならない。あの時の気持ちのままに。サポーターとして、僕は戦わなきゃいけない。

山雅サポーターとして迎える8度目の信州ダービー。ダービーで勝ったときの気持ちはいつも最高だし、それが今なら尚更、勝利の味は格別だろう。それを今日、みんな味わいたい。いつかじゃなくて、今日勝ちたいんだ。そのために、僕らは僕らにできることを、全力でやろう。ピッチの選手たちに、有りったけの声を、拍手を、力を送ろう。そして共に戦い、今日こそ山雅の本当の力を見せ付けてやろう。

今日は山雅の全てをぶつける日だ。魂込めて、行こう。